

巻頭言

投稿のお誘い

杏林大学医学部薬理学教室 櫻井裕之

科学論文の意義は、新知見を報告することであり、学位審査でも、その研究により何が新たに分かったのが重要なポイントになる。さらに、その知見がどのような意義があるかによって掲載されるジャーナルが決まってくる傾向にある。ジャーナルの格付けで頻用されるのが、インパクトファクター、すなわちどれだけのインパクト（＝意義）があったかという言葉になっているのが、象徴的である。

一方で、過去の“大発見”が、実は間違いであることも多々あるらしく、時間の洗礼をうけて生き残る論文は一流誌でもごく一部であると聞いたことがある。そのことからわかるように、論文作成時や投稿時にその仕事の意義について正しく判断するのは難しい。この問題にかかわらないようにするためか、意義については問わないことを方針にしているジャーナルもあるくらいである。考えてみれば、仕事の意義を客観的に評価することは不可能に近く、今日のように分野が細分化されると、評価できるのは論文の著者しかいないといった皮肉な事態も起こりうる。

本誌に世間一般にいう、高いインパクトのある研究が投稿されることは少ない。しかし、前述したようにインパクト、意義のあいまいさを考えると、それを恥じることはないと思う。ただ、それを隠れ蓑にせず、自らの仕事の意義をわかってもらうように努めるのも論文の著者の責務であろう。一番よくないのは、意義を強調したいあまり、科学的に正しくない論文にしてしまうことである。

日々の実験を振り返ってみると死屍累々というか、まったく新しい知見が得られなかったり、意義づけの難しいデータの解釈に苦しんだり、ということは珍しくない。というより、それが日常であるといってもいいだろう。それを科学的に正しい方法で何とか一つのストーリーにまとめることができたなら、本誌に投稿してほしい。レフリーも意義ばかりにとらわれず、科学的な正しさに重きをおいて評価してほしいと思う。